通 教 月 報
診 療 情 報 管 理 研 究
令和 8（2026）年 11 月号

編　集
発 行 人　武田　隆久
〒102-8414　東京都千代田区三番町 9-15
一般社団法人　日本病院会　事業部教育 1 課
TEL　03-5215-6647（受講生専用）
FAX　03-5215-6648（受講生専用）
URL https://jha-e.jp/
受付時間　10：00～17：00
（ただし、土・日・祝祭日、年末年始は除く）
発 行 日　毎月 1 日

# 「病院の脳（brain）」と呼ばれる診療情報管理士の役割と価値

丸山　こずえ
医師事務作業補助者コース小委員会 委員
日本診療情報管理学会 評議員
独立行政法人国立病院機構都城医療センター 医療情報管理部副部長

診療記録は急性期病院だけでなく、回復期リハビリテーションや感染症指定医療機関、重症心身障害、神経・筋難病の専門病院といったセーフティーネット分野の医療機関でも重要な基盤であり、すべての医療機関に存在します。また診療情報の在り方は、DX や生成 AI の普及により「紙媒体や個別システムでの記録・保管」から「AI による自動生成やデータ連携による共有」へ変わってきています。

診療情報の新たな業務として AI 導入に加え HL7 CDA の利用による診療記録管理、監査業務の迅速化・効率化が進められます。日々の電子カルテの経過記録やプログレスノートからデータを抽出・流用ができるようになり、退院前から記録の適格性や診療内容の妥当性を確認することができます。さらに AI の導入を契機とした入院中の適時監査がさらに容易になることも予想されることから、診療情報管理士はツールを的確に活用し、監査業務の中核として診療記録の精度を上げ、柔軟性と状況適応能力をもって、最善な運用を提案することができる専門職といえます。

多職種間で診療情報を共有しながらチーム医療を進める際に、病院全体の運営に関わる医療情報の管理と分析が求められます。医療現場における「経営や事務の論理（数字）」と「臨床の論理（目の前の命）」のずれがあり、立場や職種によって見えている景色も違います。診療情報管理士の立ち位置の特性として、医療を俯瞰的視点から捉えられることで、患者の意思決定、病院経営、医療安全などに貢献できます。多職種間の壁や溝を埋めて、コンセンサスを得ながら、最も摩擦が少ない提案で業務改善を繰り返すことができる中心的な役割といえます。

電子カルテから発生するデータはいわゆる生データであり、データの集合体をどう分析して解釈するかはデータ駆動型の意思決定における最も重要なプロセスです。職種ごとの視点の違いから得られる「インフォメーション」を検討して、包括的な視点で得られるものを患者に提示することで、よりよい意思決定に資することができます。

医療現場において診療情報管理士は柔軟性と俯瞰的視点をもつ職種であり、今後さらなる活躍に期待しています。